

第一朗読：イザヤの預言(イザヤ 49・3、5-6)；わたしはあなたを国々の光とし、わたしの救いをもたらす者とする

答唱詩編：(詩編 40・2+4ab、6、10)；神のみ旨を行うことは、わたしの心の喜び。

第二朗読：使徒パウロのコリントの教会への手紙(一コリント 1・1-3)；わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように

アレルヤ唱：(ヨハネ 1・14a+12)；みことばは人となり、わたしたちのうちににお住みになった。主を受け入れる人には神の子となる恵みが与えられた。

福音朗読：ヨハネによる福音(ヨハネ 1・29-34)；見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ

今日の福音で洗礼者ヨハネがイエスについてどのような方であることを証しているところが読まれました。ヨハネの証しはイエスを『世の罪を取り除く神の小羊』と宣言するところから始まっています。この言葉は毎週、教会が唱えているものです。その一つは「栄光の賛歌」の中で、もう一つは「平和の賛歌」の中で歌っているものです。栄光の賛歌では「神なる主、神の小羊、父のみ子よ、世の罪を取り除く主よ、いつくしみをわたしたちに」、そして「わたしたちの願いを聞き入れてください」と歌っています。平和の賛歌では「世の罪を取り除く神の小羊、いつくしみをわたしたちに」そして最後に「平和をわたしたちに」と歌っています。毎週、歌っていますが、どういう意味があるのかを知ることにより信仰を深められるのではないかと思います。

まずその意味として、エジプト脱出の夜、イスラエルの人々の家の入口の柱に屠られた小羊の血を塗って、滅ぼす者を過ぎ越したということがあります。(出エジプト 12・13 参照) 小羊の血がイスラエルの人々を滅びから解放したのです。そのことから、イエスが小羊のように自分を犠牲としてささげ、人類の罪をあがなわれたので「神の小羊」と呼ばれるようになったのです。また、洗礼者ヨハネが祭司ザカリアの息子であることから、祭司が神殿での小羊をささげることと対応してヨハネが呼ぶようになったという考えもあります。神殿では毎日、朝晩に人々の罪のために小羊をささげなければなりません。(出エジプト 29・38-42 参照)

しかし、イエスはただ一回の犠牲によって人々の罪をゆるすことができた人であり、これこそ神の小羊であるという意味で呼ばれました。最後に、エレミヤの預言(エレミヤ 11・19)やイザヤの預言(イザヤ 53・7)の中に、従順と愛によって苦難と犠牲を受け、イスラエルの民をあがなおうとする者の姿を称して「小羊」という言葉が使われています。いずれにせよ、わたしたちが今イエスを「神の子羊」と宣言することは旧約の時代から受け継がれてきた歴史や記憶とのつながりから、意味のあることだと考えられます。十字架にかけられて殺されたイエスが、新しい過越の小羊である事を伝えようとしているからです。

「わたしはこの方を知らなかった」というヨハネの言葉が 2 回出てきます。洗礼者ヨハネはイエスのいとこですから、イエスについて知らないということではなかったでしょう。ヨハネが「知らなかった」というのは、イエスがだれであるかということではなく、イエスがどういう使命を帯びている方なのか知らなかったということだと思います。ヨハネはイエス「こそ神の子である」という啓示を受けました。それはヨハネを遣わした神が『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を受ける人である』と言っていたことが実現したからです。

この記述は他のマタイ、マルコ、ルカの福音書にもありますから、それぞれの福音書を使っていた共同体がいずれも同じ信仰を持っていたということが言えます。イエスこそ神の子であるという信仰です。他の福音書では「『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた」とあります。それによってヨハネはイエス「こそ神の子である」と確信しました。

洗礼者ヨハネの証しは、人々に「救い主」がだれであるかを示すことでした。イエスが「聖霊によって洗礼を受ける人であり、イエス「こそ神の子である」という証しです。ヨハネは、あとはイエスに任せて、自分はただ退いていく者であると考えていました。ヨハネにとってイエスを証しすることはイエスが登場するまでであり、そのあとはイエスご自身に任せることになりました。人間にはそれぞれ神から与えられた召命というものがあります。ヨハネも自分の召命を忠実に生きた一人であったのです。今生きているわたしたちの召命は、イエスが残したよい知らせを伝えていくことと、それを実践していくことです。

イザヤの召命は、今日の第一朗読の最後に記されている通り、神の救いを地の果てまでもたらす者とするということでした。預言の言葉によってイザヤは、その使命を果たすことになります。

答唱詩編では、召命を受けた人の神への応答が歌われています。「わたしは人々の集いの中で、あなたの救いのわざを告げ知らせ、決して口を閉じることがない。」また、パウロは、神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったという自分の召命を手紙の冒頭に記しています。

わたしたちの召命は、イエスが残したよい知らせを伝えていくことと、それを実践していくことです。その中でイエスは神の子であるという証しが伴わなければなりません。自分の召命に気づいてイエスとともに歩むことができる恵みを願いながら、この祭儀の中で祈りをささげてまいりましょう。